

五葉も目の前に見えそ浅草かりしちうもあり

新羅宮に在るの故のちをひき首てきまゝお路のちる身を
あきらみおつゝふふ三三歳を一期とてふ佛とせいられ玉ふ
ふに當るに仙千代丸とやせし若君の母上より生年二十二
歳おあはれ前とそやうなう屋渡玉日比野下町守娘あり
結着に鍾惟子重て白結の袴きて若君の先付年よりこれ
に其死骸をいふ水精の珠敷を括て出玉ふ此程の歎きの
余り又若君の以命の神一とてきまぬはるあり村雨
に折れ水とる系糸のちおあはれあまる風情とそ中く目
もあはれぬお路あり大雲院真安上人来りて十念を
授け玉ふをかりかたあはれとて辭せに

はるあはれとてはれとてくさきまゝ何とぞ路にあひれとめ
お路のちをひき首てきまゝお路のちる身を

お五葉お百丸とやせし若君の母上より生年十九歳是
に尾張の住人山口松雲の娘あり是も若君の以死骸と
いふも我も追ひ年とて真安上人の十念とや玉ひて
あひるを世を久々の夢覚てはやくめくふふふの淨土
お路のちをひき首てきまゝお路のちる身を

お六葉お百丸のちの生年十八歳娘あり是に北野
松林院娘あり白結に結着の單袖重ぬ白き袴引をめ